氏名	坂 手 行 義
学位の種類	医 学 博 士
学位授与番号	乙 第657号
学位授与の日付	昭和49年12月31日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 （学位規則第5条第2項該当）
学位論文題目	**頸椎椎間板症性脊髄症に対する手術効果とそれに影響をおよぼす諸因子について**
論文審査委員	教授 田中早苗　教授 砂田輝武　教授 西本　詮

学位論文内容の要旨

頸椎椎間板症による脊髄症状に対する手術効果を理解する目的で，脊髄症状による歩行障害に注目し，術前と術後の障害の程度を比較するとともに，この手術効果に影響をおよぼすと考えられる因子を検討した。

歩行障害の程度は，岡本の分類で2段階，1段階改善された症例が多く，術前の歩行障害の程度が強くなると手術効果は十分でなく，痙性歩行が認められるまでに進行した症例は，術後正常に近い歩行にまで改善されることは稀である。

Smith-Robinson法より，Cloward法の方が，歩行障害の改善には優れた成績を示した。

Smith-Robinson法では，1椎間固定を行なった症例より2椎間固定を行なった症例の方が手術効果は劣る。またCloward法では固定椎間に生じる後方凸のangulationは手術効果にあまり影響を与えないが，Smith-Robinson法で移植骨片が圧潰して椎間拡大の不充分な症例の手術効果は劣る。

手術時年令は手術効果に影響を与え，50才台以上の手術効果は劣る。病年も5年以上の重症例は手術効果が劣り，手術効果に影響をおよぼす。

頸椎管前後径の最小値が14㎜以上の症例の手術効果は優れている。
脊髄造影所見と手術効果の間には，はっきりした関係は認められず，性別，病型も手術効果に影響を与えない。

論文審査の結果の要旨

頸椎椎間板性脊髄症にたいする手術々式の比較と，それに影響をおよぼす諸因子についての臨床研究であり，従来手術効果にたいする科学的判定がなされていなかった手術々式にたいして一定の科学的見解を示した点ですぐれた新知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって，本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。